



Title	ロシア語における複文の成立過程と接続詞(語)の機能について(1) : 「ラヴレンチ-本原初年代記」におけるЯКОの場合
Author(s)	石田, 修一
Citation	大阪外国語大学学報. 1986, 71(1-3), p. 21-40
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/81091
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ロシア語における複文の成立過程と接続詞(語)の機能について(1) —「ラヴレンチー本原初年代記」における ЯКО の場合—

石田 修一

О значениях и функциях слова “яко” в “Повести временных лет” по Лаврентьевскому списку в связи с путями развития сложных предложений в древнерусском языке. (1)

Сюити ИСИДА

В данной работе рассматривается полисемантическое слово “яко” как союз или союзное слово в древнерусском языке.

Наше исследование слова “яко” в значении союзов “что” и “так что” позволяет утверждать, что значения и функции слова “яко” почти всегда зависят от контекста.

Известно, что союз — периферия языка. Значения и функции союза исторически совершенствуются по мере укрепления и оформления “предикативности” как ядра высказывания. Образ проявления “яко” в исследуемом нами памятнике даёт основание утвердиться во мнении о всеобщности пути сложных предложений от паратаксиса к гипотаксису.

I. 序 論

§ 1. 古代ロシア語における複文の成立過程については、これまで多くの研究者によって述べられて来た。例えば、ポチエブニャ А. А. Потебня によれば、それは二つの道を辿ったことになる。それは、複数個の単文の結合による複文の成立過程と所謂「二次的述語」второстепенное сказуемое、換言すれば、分詞（形動詞）による構文の再編・発展による複文の成立過程を指したものである。そして、この第一の道による単文の結合は、最も原初かつ純粋な形ではパラタクスの的な手続きによるものであって、この形式の中から接続詞（語）の意義・機能の分化・安定と相俟ってイポタクスの生成が漸次行われて来た、とするのである。この事情は、もとよりスラヴ諸語に限ったものではない。以上に関連して、ヤクビンスキーは概ね次のように述べている⁽¹⁾。すなわち、「第一の道こそ従属複文発展の一般的な道である。なぜならば、それは接続詞の配置とその機能分化の相互作用によって、従属性の最も多様な意味ニュアンスを表現することを可能にしたからである。ところが第二の道はそうではなかった。ともかくは従属性表現の可能性をもってはいたが、この従属の性格付けを曖昧にしたからである」と。古スラヴ語 старославянский язык, Altslavisch, vieux slave⁽²⁾より受け継ぎ、古代・中世ロシアを通じて盛んに用いられる分詞構文（形動詞構文）、所謂「独立与格」dativus absolutus をも含めて、古文における分詞の活躍は目ざましいが、意味的にはともかく、文

法形式としては従属文の形式を有しない形動詞構文は、一般的には他のスラヴ諸語におけると同様、ロシア語においても複文の形式に預るよりはむしろ、副動詞構文などに発展して単文の範囲内から脱することができなかつた、という訳である。

しかし、一般的な大きな流れとしてはともかく、個別的には数多くの反証を挙げることができよう。例えば、ハルパレヴァの報告しているように⁽³⁾、所謂「第二対格」второй винительный падежの形動詞が補語的従属文へ発展して来る過程：

1. зау^тра же видѣвша людье князя бѣжавша. возвратишася Киеву (Лет. Лавр., л. 58 об.)

から始まって、

2. видѣхъ, яко князя идуща съ сѣни доловь (Лет. Моск., л. 102 об.)

第二対格形動詞に加えて、якоを導入してくる過程、

3. видеша на столе свещи горит (Вонн. пов.)

第一、第二の両対格をくずして、無接続詞構文 asyndetic construction に変えてしまう場合、また、これらに関連した例として、

4. в то же время прибѣгоша из Руси дѣцкии и повѣдаша ему Володимера в Черниговѣ, а Изяслава въ Стародубѣ (Лет. Моск., л. 47) 第二対格の部分に locativus をおく場合

5. придоша же ратнии Татарове, не вѣдуще его ту (Лет. Моск., л. 29 I об)

locativus が ту に変っている例。

6. а нынѣ, господине, князя не вѣдаю гдѣ (Акты истор., т. I, III, No 127, 1521г., с.187)

locativus が гдѣ に変る例、

等、これらの例には、複文への潜在的な方向性が見られるし、いわば分裂寸前の細胞の如き状況を読みとることができよう。このように、ヤクビンスキー説が妥当かどうかは、恐らく解決済みとは言い難いであろう。しかし、パラタクス parataxe, parataxis よりイポタクス hypotaxe, hypotaxis への発展という図式は、概して、多くの研究者の述べて来たところである。

§ 2. いずれにせよ、文における明確な意味関係を反映した複文形式—並立にせよ、従属にせよ—の成立を見るのは後世になってからであり、それは相当長期にわたる容易ならざる人間の認識活動の言語的集積の結果なのである。

古文テキストの任意のページを開いた時、直ちに目に飛び込むのは、и, а, да 等の接続詞に繋がれる文の多用である⁽⁴⁾。例えば、

1. и исполчишася русь, и бысть сѣча велика, и одлѣ Святославѣ, и бѣжаша грѣци, и поиде Святославѣ ко граду воюя и грады разбивая, яже стоять и до днешняго дне пусты, и созва царь боляре своя в полату, и рече имъ... (Лет. Лавр., л. 21 об.) [そしてルシは武装し、そして大いなる戦闘があった。そしてスヴァトスラフが勝ち、グレキが敗走した。そしてスヴァトスラフは戦い、町々を破壊しながら都へ進んだ。それら（の町々）は今日に至る迄も荒れはてたままである。そして皇帝はおのれの貴族たちを宮殿へ呼びあつめ、そして彼らに言った。]⁽⁵⁾

2. Прѣставися въ Руси Всѣволодъ мѣсяця июля, и сѣдѣ на столѣ его брат Игорь, и сѣдѣ 2 недѣли, и негодовахуть его люде, и въздаша вѣсть къ Изяславу Мвьстьславичю Переяславлю, и приде съ вои, и бишася, и поможе богъ Изяславу, и сѣдѣ Изяслав на столѣ, и Игоря самого яша 5 день по побонци, и порубиша и ; а на осень вымолися постричься, и пострижеся. (Нов. пер. лет., л. 24, 24 об.)〔ルシにおいてフセヴォロドが7月にみまかり、彼の兄弟イゴリが公座についた。そして(彼)は2週間(公位)に坐した。そして(人々は)彼に不満を抱いており、ペレヤスラヴリのミスチスラフの子イジャスラフのもとへ報せを送った。そこで(彼)は軍勢をひきいて来たり、そして(両者は)相戦った。そして神はイジャスラフを助け給い、イジャスラフが公座についた。そして(彼らは)イゴリ自身を戦闘の後5日目に捕え、彼を捕虜にした。一方(彼は)秋に得度することを願い出て得度した。〕

ここに、иによって連結される文は、一つの複文の同種成分ではなく、それは物語テーマの同一性に基いてのみつながっている個々別々の独立単位なのである。文の構成単位間の関係は、論理的、意味的なまとまりをもった連結などではなく、同一テーマ、内容に関連するあらゆる情報が、珠数繋ぎに、閉じることなく続いて行く連鎖文である。イストリナの言う цепное нанизывание предложений⁽⁶⁾、またブレアブラженскаヤ、ケルシェネの言う цепочное нанизывание предикативных единиц⁽⁷⁾である。また、ポチエブニヤは、この状況を指して「遠近画法のない絵」の如きものだ、と述べているが至言である⁽⁸⁾。

上例の連珠文ないしは連鎖結合文は、最も原初的と考えられる形式のモデルであるが、大多数の場合それはそれほど純粋な形で現出して来る訳ではない。

послании же пришла на Лето ночью, и подступиша ближе, и слышаша блаженного Бориса поюща заутреню : бѣ бо ему вѣсть уже, яко хотять погубити ѿ. И вѣставъ нача пѣти, глаголя : Господи ! что ся умножиша стужающии мнѣ... (Лет. Лавр., л. 45 об.)〔ところで、遣わされたものたちは、夜中リトに来たり、そして、より近くしのびよって、至福なるボリスが朝の祈りを歌っているのを聞いた。というのは(彼らが)自分を殺そうとしているという知らせが既にあつたからである。そして(ボリスは)立って歌いはじめて言った。「主よ！私を苦しめる者たちが何故増えたのであろうか？… …〕

この文では、бо、якоが加わっている他、第二対格の形動詞を含めて形動詞が多用され、文に起伏が与えられている。かくて連鎖はすでに亀裂を生じ、複数の連鎖に分化、発展して行くのである。その最も重要なモメントを作り出して行くのが接続詞と接続語の意義と機能の安定化である。

ところで、こうした и、а、даなどの接続詞の意義と機能についての研究によれば、この接続詞 иは、原初的な形にせよ並立複文を形成して行く並立結合の機能、単文における同種成分を結ぶ機能の他に、新たな独立文の文頭開始を告げるサインでもあつた。所謂「導入・結合接続詞」начинательно-соединительный союзである。古文のテキストがイニシャルを使用せず、単語間の字間をあけず、かつ文頭、文末を示す約束も未発達で、句読点とて無原則的であることから、それは当然であろう。

また、コロターエヴァが多数の例を挙げた17世紀という従属複文成立史上の過渡的段階に現われて

いる文型⁽⁹⁾、ポチエブニヤ流に言えば、「パラタクスの従属」паратаксические придаточные や「パラタクスの連関」паратаксическая относительность の跡を止める и как он пришел, и в то время ты сказал. や, который человек пришел, и того человека ты знаешь. のタイプに残る結合接続詞は、「ここでは文の構成単位間のいまだ結合不十分なるを縫合する如き役割をもつ⁽¹⁰⁾」ということになる。すなわち、従属文としての機能の不安定さ—それは従属接続詞や関係詞の不安定に依るが—を補足するために置かれた и である。言い換えれば、未完成段階の従属複文の原初型においては、各構成単位の独立性がいまだ高く、主文—従属文の結びつきが不完全であるため、その「接目」шов を縫合して、主—従の単位を一セットとして提示する必要があったのである。ロマノーフも、こうした接続詞の多用を釘や糊に例えて過度の使用に警告しているが、そうかと言って「裂目」щель を作ってしまっただけでは言葉がくずれてしまうから修辭上推薦できない、という趣旨のことを述べているのは面白い⁽¹¹⁾。

また、コロターエヴァの引用している、この接続詞に関してのアレクサンドロフ（Н. М. Александров）説も興味深いものがある。すなわち彼はこの接続詞 и の反復は一定の効果を期待した文体的手法ではさらさらなく、意志伝達の機能よりむしろ言語の情緒表現機能がある、というのである。「それは、第一には、思惟表現のいくばくかの困難さの表われであり、そのことが止むを得ざる間隙に『空の』語を嵌め込ませるのである。第二に、明らかに、主として、単語に表現された二つの思惟の間に、かつまたいまだ単語に表現されざる思惟とただいまその瞬間に単語に表現された思惟との間に、また恐らくは未完成のまま言語化された思惟との間にも意識される密接な繋がりを言語に反映せんとする意向の表われである」思惟の間のこの繋がりの意識は決して常なる訳ではない。このことは、古いテキストには接続詞の多回反復と同時に、接続詞不在の場合も見られることによって説明できる」と書いているのである⁽¹²⁾。

さて、ソビエトの多数の研究者たちは、これらの導入・結合接続詞等による連鎖結合が崩れて、そこから次第に近代的な並立複文と従属複文が発展して行くのであり、цепное нанизывание はまさに複文発展の原初型である、というほどの意味でパラタクスからイポタクスへの発展という図式をとらえて来たものと判断できる。

しかしこうしたとらえ方に反対を表明した学者がない訳ではない。例えば、ロムチエフはそうした反対者の一人である。ところが彼の「従属文の接続語が並立接続詞より発生したものでない、という事実が、従属結合が並立結合より発生したものでないこと、また従属複文が並立複文より発生したものでないことを証明している⁽¹³⁾」というが如きは見当外れである。したがって、スプリンチャクの側から、従属接続詞と並立接続詞が起源的に無関係であることは解り切ったことであり、そんなことが、パラタクス→イポタクス説に反対する論拠とはなり得ない、という批判を受けている⁽¹⁴⁾。そこで更にロムチエフを読み進むとおよそ次のように書かれている。「従属 подчинение が並立 сочинение から発生したというこの学説は一つの概念の中に二つの対立する現象、すなわち並立という概念と異種文 неоднородные предложения を同種的に継続して行く однородное следование という文法関係の一つにしてしまっている。このことに基いて従属が並立から発生したとする推論が引き出されているのである⁽¹⁵⁾」。しかし実

証の示すところによれば「従属が、文のペア的統合による同種継続の文法関係より分岐したものであり、加えて、通常従属文の機能で定着して行くのは間接法つまり疑問、命令、ないしは願望を表わす文なのである」⁽¹⁵⁾としている。ここに言う「同種」、「異種」とは、法、時制、人称等に関して同じレベル、異なるレベルという意味であり、したがって「異種文を同種的に継続して行く文法関係」とは結局連鎖結合 *цепное нанизывание* を指したものである。だとすれば、彼は連鎖結合の概念を並立の概念に含めることに反対しているのである。恐らくロムチェフにとって *сочинение* の概念は「同じ範疇または機能の二つの語や語連続の結びつき」⁽¹⁶⁾ というほどの意味であり、*co-ordination* に相当する概念でなくてはならない。一方、スプリンチャクは、*сочинение* = *паратаксис* とした上で、これは「並立複文の構成員である各単文が①独立的言表の意味および②独立文の統語形式、を保持すること③連結される単文の文法的結合手段としてイントネーションと並立接続詞あるいはイントネーションのみを使う」というような特徴を有する、としている⁽¹⁷⁾。確かに露語文法では通常 *сочинение* はロムチェフ的な意味で用いるのであるから、この辺りにこの論争の関りがあると考えられる。またロムチェフは認識論的な一般論を述べたのではなく、より具体的に複文分化論を展開しようとしたものだ、と言える。

比較的近刊のボルコフスキー編「ロシア語歴史文法・統語論・複文」の中で、「定語的従属文」の執筆者ケルシエネは、ロムチェフを引用しながら「従属が並立から発生したものでなく、それと同時に萌芽したものである、という見解を持するならば、複文（並立複文、従属複文双方）の発生は、同種継続の文法関係へ鎖いで行く *нанизывание* 古典的方法の途上に異種文——単文＝単文と二単文＝複文——が現れたということに関連がある」、「このようにして、所謂導入接続詞は歴史的、機能的に構文内にある並立接続詞と同じである。すなわち、どちらも言葉の一続き中の単文の古い繋ぎ目と切れ目の指標である」としている⁽¹⁸⁾。この記述は、連鎖結合の途上つまりその結合と同時に、言い換えれば、そのような結合方法自体が古典的な単文構成法であり、かつまた同時に古典的な複文構成法であった、ということであろう。

もとより、連鎖結合の中にほとんど同時的であれ、単文に加えて複文の古典的な萌芽があることは当然のことである。しかし、それにも拘らず、連鎖結合における各単位を結ぶ鎖（接続詞、接続語等）が未分化であり、各単位の独立性が強いものであったことを考慮するならば、その状態の中から単文と複文が分化し、その複文の中から並立接続詞に関係した並立複文は比較的早く、また代名詞、副詞等から発展する従属接続詞に関係する従属複文はより遅い時期に形式が整って来た、という事情をパラタクス→イポタクス説が図式化したとしても状態の認識において賛否両論さほどの差はないと考えられる。

また、以上に関連して付言すれば、古代ロシア語の時期には、並立複文は従属複文に比して圧倒的に多数であり、このことは「モノマフの庭訓」や「イーゴリ軍記」等の研究を行ったオブノルスキーの指摘によっても明らかである⁽¹⁹⁾。また無接続詞複文の分野においても、例えばステツェンコの報告では「ラヴレンチー本原初年代記」における無接続詞複文の総数(813例)中、317例(36.6%)

は並立複文の意味をもつ無接続詞複文なのである⁽²⁰⁾。

要するに、古代ロシア語の複文は、連鎖結合法 *нанизывание*、従属的結合に対する並立結合の優勢、バラタクスの従属の痕跡の残存、接続詞（語）なかならず従属接続詞の機能、意義の不安定、未分化等の相互作用の上に徐々に動きつつあったのである。

II. *яко* の意義・機能についての概観

接続詞の機能の第一は結合機能であり、第二に意味機能であるが、古代ロシア期はこの意味機能の発展過程であり、その発達史が従属複文の発達史なのである。すなわち従属複文の発達は従属接続詞の発達と有機的な連関性をもつものである。本稿は、その意味で「ラブレンチー本原初年代記」における *яко* の意義、機能を分類、調査することによって従属複文の発達史について考えてみることを目的としたものである。勿論、古文における従属複文の生成の環になる従属接続詞の体系の未発達、未分化については多くの研究者の指摘するところであるが、それらの中でも特に *яко* の多義性は典型的である。

このことを最も具体的に例証して見せたのがイストリナの「ノヴゴロド第一年代記シノド本における統語現象」という研究であり、以来多くの研究書の引用するところとなっている。それによれば、*яко* は、①補語的従属文を主文に繋ぐ接続詞 *что* ないし *как* として、②直接話法導入サインとして、③結果の意味 *так что* として、④原因・理由の意味 *потому что* として、⑤時の接続詞 *когда* として、⑥目的の意味 *чтобы* として、⑦比較、様態の意味 *как* として、機能したことになる⁽²¹⁾。

もとより、この *яко* は古スラヴ語より引き継いだものであり原初的には *так*、*како*、*всяко* 等と同じく、動作様態の意を有する副詞であって、これらは更に代名詞語根 *j-*、*t-*、*к-*、*вь-* 等に *-ак-о* なる形容詞中性形が習慣化したところに由来する。また *j-* は指示代各詞 *и [j-ь]*、*его [j-его]*、*ему [j-ему]* 等におけると同じく指示・関係的意義を有する代名詞語根である。したがって *яко* は起源的には代名詞的副詞であって、本来 *так*、*вот*、*ведь* の意をもつ。その限りにおいて、*пояснение*（説明—すなわち文の一方による他方の文の説明、他方の文内容の闡明）一般をその機能の基本としており、そのことが文結合手段一般への道を開くことになるのである。つまりその説明的意義に具体性を欠けば欠くほど文結合手段としてより広く規則的に使用されたのであり、これによって繋がれる文間の意味関係は本来的に多様かつ融通性をもつのである。したがって、古スラヴ語においても動作様態・比較、時、原因・理由、条件、結果、補語的従属文を繋ぐ *что* 等の意義・機能を有したのである⁽²²⁾。

17世紀の従属複文の状態を研究したコロターエヴァも、こうした多義性が17世紀にまで及んでいることを例証している。すなわち、補語的従属文を結ぶ *что* として、原因・理由、結果、目的、条件、時、比較等の意義をもつものとして、使用された、としている⁽²³⁾。

また、ロシア語からは結局 *яко* は駆逐されるのであるが、その執拗さは18世紀にまで及び、ラジーシチェフの「ペテルブルグからモスクワへの旅」において見られる⁽²⁴⁾。更にブラホフスキーの報告によると、19世紀初頭には「一定の文体的目的で使用されるだけの甚だしきアルハイズムとしての

み可能」という状態になるようである。彼はここでプーシキンの「ボリス・ゴドゥノフ」の例を引いている⁽²⁵⁾。

現代ロシア語以外の東、南、西のスラヴ諸語においては [ako], [jak(o)] として残っており、その機能について言えば、各個別言語内では古スラヴ語に存在したすべての意義を網羅している訳ではないが、スラヴを全体として見れば、古い意義は出揃うのである。概して言えば、古スラヴ語の多義性は同じ南スラヴに属するセルボ・クロアチア語およびブルガリア語ではかえって消えており、akoの形で条件、譲歩の意義しかもたないが、ロシア語以外の東スラヴではякの形で南スラヴより広い意義を有し、特にウクライナ語において多義的である。また西スラヴも概して多義的で古い意義をよく残すが、チェコ語、ポーランド語に二つずつあるjak, jakoを比べれば、多義性をもつのは前者jakである。スロヴァキア語はakoの形であり、やはり多義的であるが、西スラヴの中では高地ソルブ語は、資格、時、比較の意義をもつにすぎない。例として以下にソルブ語とセルボ・クロアチア語を挙げる。

1. Bohuzěl zahe zemrě, jako 27 lětny. [不幸にして27歳で夭逝した。]
 2. Andricki porěča potom jako redaktor “Łužicy.”
[あとでアンドリツキが「ウーヅツア」編集員として演説した。]
 3. Jako so sotře domoj wrócištej, sydnyštej so hnydom za bñdo a započestej listy pisać. [2人姉妹が家に戻った時、2人はすぐ机に坐って手紙を書き始めた。]⁽²⁶⁾。
 4. Wón bēžeše, jako bychu jeho honili.
[彼はまるで自分が追われているように走った。]⁽²⁷⁾。
 5. Doći ću ako budem imao vremena. [私に時間があれば来ます。]
 6. Ako je kratak dan, duge je godina. [一日は短いけれども一年は長い。]⁽²⁸⁾
- 1～4はソルブ語、5、6はセルボ・クロアチア語である。

最後に、スレズネフスキーをもとに整理すれば、古代ロシア語におけるяко, якожеの意義は次のようになる。上段は副詞に分類されるもの、下段は接続詞に分類されるものである⁽²⁹⁾。

意義 副詞	как	когда	точно; как будто	равно как	как только	приблизительно; около чего-л.	так; так например	даже	影射語法 使上級の意義をもつ
яко	+	+	+	-	+	+	+	+	+
якоже	+	+	+	+	-	-	-	-	-

意義 接続詞	что	что де; что мол. 意欲主語式	так что	чтобы	так как; либо	хотя
яко	+	+	+	+	+	+
якоже	-	-	+	-	+	-

+ = 当該の意義を有する
- = 当該の意義を有しない

Ⅲ. 「ラヴレンチー本原初年代記」⁽³⁰⁾にあらわれる яко (же) の意義・機能について

一般的には、古語における並立接続詞と従属接続詞の意味的乖離は現代語と比べればいわば朦朧とした状態にあり、その距離的隔たりが小幅にとどまる場合がある。動詞派生のものであれ、代名詞派生のものであれ、まず文結合手段一般を獲得することが従属接続詞たらんがための第一歩であった。文結合手段一般を獲得しつつ、一方で他の接続詞との弁証法的な関係の中で、結合の具体的なあり方すなわち各職能への分化を確定して行くのであり、現代語と言えどもこの過程の外にある訳ではない。そして古典的な状況の中での従属接続詞とそれに繋がれる従属複文を現代語の感覚で分類すること自体無理がある。それは第一には、上述したように文結合手段一般こそがその職能の基本であり、従属接続詞の具体的な意味的分化が未発達であったという状況、第二に、各種従属文が本来的に内的連関性を有するという意味において困難なのである。例えば、条件文（～ならば）と原因・理由文（～だから）の差異はアポドシスに対するプロタシスに仮定的、可能的なものを措くか、現実³¹に存する事実を措くかということにすぎないし、条件文と時間文（～時）においてもその二つの関係は緊密であり、後者における主、従節の現象が恒常的³¹な反復や未来に関係する場合には後者は前者に転ずるのである⁽³¹⁾。さらに定語的従属文（～するところの（もの））が条件の意（～するとすれば（そのものは））を内包する場合もある。この論理的、意味的な内的連関が同一接続詞を条件にも時間にも原因・理由等の意味にも機能せしめ、その結果接続詞は多義的で極めて融通性の高い態様を示すのである。要するにこの内的連関全体の朦朧さこそがその接続詞の意義なのである。

яко はそうした接続詞の典型であり、その具体的な意味はコンテキスト一般に支えられて初めて顕現して来るにすぎない。すなわち、述語の形式（テンス、アスペクト、ムード等）や主、従節の配置順序、主節における相関語 *коррелят* の有無等のパラメーターに支えられながら徐々に自らの職能を確定して行くのである。

まず、上のような意味で融通性の高いと思われる例を下に挙げる。

1. *Якоже ны видѣ неправо пребывающа, нанесе намъ сущюю рать и скорбь.* (л. 74 об.) [間違つた生活をしている我々を(神は)見給うたので、我々にこの戦争と悲嘆をくだし給うたのである。]
2. *Бѣлозерци же шедше яша я, и привелоша къ Яневи, и рече има : "что ради погубиста толико человекъ?" Онѣма же рекшема : яко ти держать обилье, да аще истребивѣ сихъ, будетъ гобино..."* (л. 59 об.) [ところで、ペロオゼロの人々は出かけて、彼ら二人を捕え、そしてヤンのもとに連れて来た。そして(ヤンは)彼ら(二人)に言った。「何のために(彼ら二人は)かくも多くの人々を殺したのか?」と。ところで彼ら(二人)は言った。「あれらの者たちは富を貯えているからである。もしも(我々二人が)これらの者たちを亡ぼせば、豊かなる物が出て来るであろう...」]
3. *Си слышавъ Володимеръ, рече посланымъ отъ царю : "гладолите царема тако : яко азъ крещюся, яко испытахъ преже сихъ днии законъ вашъ, и есть ми любо вѣра ваша и служенье..."* (л. 38)

[ヴォロヂメルはこれらの者たちの言うことを聞いて皇帝たちからの使者たちに言った。「皇帝たちにかく言え。『我は洗礼を受けよう。今より以前に（我は）汝らのおきてを調べ、そして汝らの信仰及び勤行は我の気に入っている…』と。]

上例において、1 の場合のяко はкогда の意を持つとも解釈できる。原因・理由の従属文の場合は、後述するように主文に対して後置される例が多い。それ以外は決定的な規準はなく判定は難しい。したがって、リハチヨフはこれをВот и нас видя... と副動詞にすることによって、明解な訳を避けているのである⁽³²⁾。本稿ではこれをкогда の意に帰属するものとした。また上例2においては、яко の役割は直接話法導入であるとも考えられる。伝達・発話動詞рекшема のあることによってそのように解釈することも可能である⁽³³⁾。上例訳はчто ради に対する理由の開陳である。上例3は、2 及び3に比べれば明解である。すなわち初めのяко は直接話法導入機能であろう。しかし次のяко は上例訳では直接話法導入機能としてのニュアンスが強い。リハチヨフは、これを原因・理由の意に訳している⁽³⁴⁾。本稿では、上例2及び3の後ろのяко を原因・理由の機能として分類した。

こうした例は相当数にのぼり、分類すること自体無理が伴う場合がある。しかし、それを念頭に置きながら、それぞれの意義・機能への帰属を敢えて決すれば以下のようなになる。意義・機能の分類は、概ね、前述のスレズネフスキーのそれに従った。

	что (補語的従文等)	так что (結果)	когда (時)	так как ; ибо (原因・理由)	если (条件)	чтобы (目的)	чем (比較対象)	как (資格)
яко	178	20	26	62	1	2	1	11
якоже	4	2	3	4	0	0	0	1
計	182	22	29	66	1	2	1	12

	кото- рый 等。(述語的従文)	точно ; как будто 等(比較)	как (様態等)	так ; так например (例示等)	как (準拠)	приблизительно ; около ч.-л, (概数等)	総計
яко	5	32	18	9	1	6	372
якоже	6	3	38	17	49	0	127
計	11	35	56	26	50	6	499

§ 1. 接続詞что の機能

上表に見られるようにяко (же) の総数499例中この機能で現れるяко (же) は182例であり約36.4%を占める。これをさらに、主文にあらわれる動詞(述語)⁽³⁵⁾の種類別に分類したのが下の表である⁽³⁶⁾。

А	речи	глаголати	сказати	повѣдати	прорѣцати	проповѣдати
яко	21(18)	32(29)	1	16(5)	1	2
якоже	2(2)	0	0	0	0	0
計	23(20)	32(29)	1	16(5)	1	2

ロシア語における複文の成立過程と接続詞（語）の機能について

	прозърѣти	клятися	зазърѣти	писати	計
яко	1	8	1	1 (1)	78 (53)
якоже	0	0	0	0	2 (2)
計	1	8	1	1 (1)	80 (55)

B

	видѣти	увидѣти	слышати	въкусити	узърѣти	計
яко	13	3	15	1	1	33

D

	радоватися	съжалитися	計
яко	1	1	2

C

	вѣдѣти	вѣдати	увѣдѣти	увѣдати	мнѣти	разумѣти	испытати	помышляти	計
яко	13	1	5	2	5 (1)	6	1	1 (1)	34 (2)

E

	являти	сѣбѣдѣтель- ствовати	прообразити	計
яко	1	1	1	3

F

	умиритися	цѣловати	计
яко	1	2 (1)	3 (1)

G

	хотети	计
якоже	1	1

H

	вѣсть	слово	рота	истина	молба	рѣчь	извѣтъ	риць	计
яко	9 (1)	1 (1)	4	0	1	1	1	1	18 (2)
якоже	0	1	0	1	0	0	0	0	1
计	9 (1)	1 (1)	4	1	1	1	1	1	19 (2)

I

	радѣ	дивно	чудно и дивно	пристранѣ и страннѣ	благо	увы	计
яко	2	1	1	1	1	2	8

上表中、()内の数字は直接話法導入に使用される場合のяко(же)の数である。すなわち、接続詞чтоの機能でのяко(же)の総数182例の内 55(A)+2(C)+1(F)+2(H)=60 例、約3分の1がこの直接話法導入の機能である。しかもそれはほとんど主文の発話・伝達動詞речи, глаголатиとの組み合わせにおいて発現するのである。11-14世紀において直接話法導入に使われる動詞としてこの二動詞の頻度が最も高いことは、他にも報告がある⁽³⁷⁾。

前掲例3は、рече...“глаголите...”の如くякоを媒介せずにречеをもつ主文に直接繋がる直接話法の構文であるが、直接話法の形式を残したままその上にякоをいわば破せる形で主文に連結するこの形式は、「～のように；～というふうに（言う）」の意を有していたものと考えられる。ロパーチナの報告によっても、このякоの機能は他人の発言を特に区別して提示することの他に、この語の本来の意味から出て来る意味、つまりスレズネフスキーの書くчто, де; что мол ないしはモロトコフの書くкак, つまり, подобным образом; в духе того; в таком роде のニュアンスを添えることだとしている⁽³⁸⁾。前掲例3の……глаголите тако, яко…のяко以下は直接話法中の直接話法であるが、このякоはまさにтакoが前に置かれてякоのこのニュアンスを伝えている。文法・統語形式においては、якоを置くことによって一見文法的抽象度の高い形式を有するようでありながら、яко以下に直接話法が置かれるという具体性もさることながらяко自体が極めて瑞々しく具体的な意味を担っていたと言える。上記ロパーチナは、このニュアンスによって他人の発言を直接的に感得する効果が希薄になる、としている⁽³⁹⁾。まさにこの故に一方では間接話法的表現ニュアンスをもつのである。したがって間接話法でもякоは使われるが、文法的抽象度において劣るякоは、上のような直接話法の過渡を担った場合は勿論、間接話法のякоも歴史の舞台からは消えて行ったのである。

さて、182例より直接話法の60例を差し引いた122例は、якоの総数499例の約24.4%に当る。この24%は、якоの率いる間接話法文も含めるとして、補語的従属文を率いるчто ないしはкакの機能で用いられる。この場合、主文に置かれる述語には謂わば一定のディアパゾンが存在し、上表A-Iに見られるように、伝達・発話、知覚、認識、感情等を表わす語が置かれた。ステツエンコはякоによって導入される補語的従属文が構造上完成したものであったとしている⁽⁴⁰⁾。またハルパレヴァも、「ラヴレンチー年代記」を含めて11-14世紀頃の古文献において、この機能でのякоは他の接続詞を圧して絶対的優勢であった、と報告している⁽⁴¹⁾。ただこの年代記に挿入される「モノマフの庭訓」においては、直接話法導入のякоは一例も見られず、また補語的従属文導入のそれもразмъните и видитеに続く場合とпрозритьに続く場合の二例が見られたにすぎない。尤もオブノルスキーはяко自体が本来「庭訓」のものでなく補語的従属文についても同じであると述べている⁽⁴²⁾。なお、後者の例文を下に示す。

Господь же посмѣется ему, и прозрить, яко придетъ день его. (л. 78 об)

〔ところで主は彼を嘲笑し、彼の（結末の）日が来るであろうことを予見し給う。〕

現在の聖書では「詩篇」37篇13節に見られるこの一節は、英訳においてもthatを以てし、⁽⁴³⁾。リハチヨフ訳⁽⁴⁴⁾及びモスクワ総主教管区訳も⁽⁴⁵⁾что、日本聖書教会の口訳も⁽⁴⁶⁾「彼の日の来るのを見ら

れるからである」, 同文語訳⁽⁴⁷⁾「かれが日のきたるを見たまへばなり」である。唯一フレノヴァは、このяко をкогда に解釈し、時の従属文の例として挙げている⁽⁴⁸⁾。時の従属文の例として挙げるのであれば誤りであろうが、接続語когда の機能のяко が率いる補語的従属文として、「来る時を～」ならば、そのような解釈は可能なのであろう（聖書思想を無視して、文レベルでだけ考える時）。

さて、что の機能として分類したものの中には、次のようにбудто のニュアンスを含む場合も入っている。

Посемъ же бысть звѣздамъ течение, съ вечера до заутря, яко мнѣти всѣмъ, яко падають звѣзды.

(л. 55об.)

〔ところで、この後、星の流れがあった。夕方から夜明けまで。誰もが、星が落ちているように思われるほどであった。〕

この場合のяко には仮定的な叙想性が付加されていようが形態・統語法上特別な形式がある訳ではない。この種のяко は他に一例認められる (л. 88 об)。

この他さらに以下のように、事実を伝えるのではなく義務、必然、願望、可能性などの叙想性を含む例が認められるが、それらは上のяко のようにその叙想性を文脈全般に依存している訳ではない。何よりも、яко 以下に不定詞が置かれるという点が、その叙想性の指標である。主文の述語としては次のような述語（願望、誓約、盟約、通告、予告等を表わすもの）がякоже に対して2例、яко に対して9例（повѣдая に対しては連続して繋がるяко が2例）、計11例見られた。

якоже ……хощю, подобашеть реши

яко ……повѣдая, повѣдаше, кляся, прорѣцаху, бѣ рядъ имѣлъ, заходилъ ротъ, ротъ ходить, повѣдаста молбу

そのうち2例を以下に示す。яко (же) 以下はいずれも、与格補語と不定詞で現れている。

Живъ азъ Аданаи Господь, якоже не хощю смерти грѣшника, но якоже обратится ему отъ пути своего злого. (И. X.)

〔我は生ける主なるアダナイである。それ故に（我は）罪人の死を望まず、彼がおのれの（悪の）道から離れ、生きていることを（望む）。〕

Пришедъ бо Киеву глаголаше сице, повѣдая людемъ, яко на пятое лѣто Днѣпру потещи вспять и землямъ преступати на ина мѣста, яко стати Гречьскы земли Рускои, а Русьскен на Гречьскон, и прочимъ землямъ измѣнитися. (л. 59) 〔（彼は）キエフに來たり、人々に物語ってかく言った。「5年目にドニエブルが逆流し、大地が別の位置に動き、グレキの国がルシの（国）に、ルシの（国）がグレキの国に位置し、また他の国々も変る筈だ」と。〕

上記第1例における従属部の叙想性はхощю 自体の語義の表わす叙想性と不定詞の表わす叙想性の機能に支えられて成立している。この場合のякоже はчтобы の機能である。хотети + [与格+不定詞] の語結合において、〔 〕の前にяко (же) を介在させる方法は、勿論、安定した補語的従属文を生成して行く過程上のものであろう、と思われる⁽⁴⁹⁾。イポタクスへの過渡を担ったものである。第2例

においても不定詞の表わす叙想性に大きく依存してякоの機能が変質する。上述のハルパレヴァも、ブラホフスキーの引用と共に、古代ロシア語の不定詞が現代語のそれに比して大きな叙想表現機能を担っていたことを指摘している⁽⁵⁰⁾。こうした場合のякоは、不定詞を核にした構造の拡大によって薄れた主動詞と不定詞の結合関係を回復ないしは明示する為に添えられたものと見なすことができよう。それ故、якоなしの構造も可能である限りにおいて、そのякоの機能はほとんど結合機能一般を支えているにすぎない。

したがって、概してこのчто機能でのякоは比較的安定した信頼性をもっていたとは言え、やはりその機能を相当程度文脈上の環境に負っていることが分る。この自立性欠如と多義性によって、やがて中世へ向って、特に口語ではчтоによって駆逐されて行ったのは当然である⁽⁵¹⁾。

なお、A～Iまでの主文における述語の実際に文証される形とその箇所は以下の通りである。

A. речи — рекоша л. 4, ▲подобашеть рещи л. 20 P, рече л. 16 об., рѣша л. 21 об., рѣша л. 26 об., рѣша л. 31, рече л. 34, рече л. 34 об., рѣша л. 37, рече л. 41 об., рек л. 43 об., рекъ л. 43 об., рече л. 47ИХ, рѣша л. 48 об., рѣша л. 64 об., рече л. 65, дерзнетъ рещи л. 75, реуще л. 87, рекуща л. 88-об. рече л. 88 об., рѣша л. 89, бѣша рекли л. 90 об., речеть И (▲印はякоже に対して現れるもの。以下同じ)

глаголати — глаголя л. 8, глаголюще л. 9 об., глаголя л. 18, глаголаше л. 18, глаголя л. 22, глаголя л. 24 об., глаголюще л. 27, глаголюще л. 28, глаголя л. 33 об., глаголите л. 38, глаголютъ л. 38 об., глаголаше л. 45 об., глаголя л. 45 об., глаголюще л. 50, глаголюща л. 59, глаголаща л. 59, глаголашеть л. 61, глаголашеть л. 61, глаголя л. 61 об., глаголя л. 61 об., глаголетъ л. 62, глаголюще л. 63, глаголюще л. 63, глаголаху л. 71 об., глаголаху л. 72, глаголаше л. 73, глаголя л. 85 а сер., глаголя л. 90 об., глаголя л. 91, глаголаху л. 91 об., почаша глаголати л. 93 об., глаголетъ И.

сказати — сказануть л. 4

повѣдати — повѣдаша л. 15, повѣдаша л. 21 об., повѣдаше л. 30, повѣдаша л. 44, повѣдаша л. 47, повѣдаше л. 56, повѣдая л. 59, (повѣдая л. 59,) повѣдаша л. 59, повѣдаше л. 66 об., повѣда л. 86, повѣдаша л. 86, бѣ повѣдалъ л. 87 об., повѣда л. 88 об., повѣдаю л. 89 об., повѣда л. 91

прорѣцати — прорѣцаху л. 28

проповѣдати — нача проповѣдати л. 35, проповѣдаша л. 36

прозърѣти — прозреть л. 78 об.,

клятися — кляся л. 32 об., кленуся л. 89 об.,

зазърѣти — зазряще л. 20 P

писати — пишюче л. 12

B. видѣти — видите л. 3 об., видѣвше л. 20 об., P, видѣхъ л. 23 об., видѣвъ л. 25, видѣвъ л. 29, видѣ л. 29, видившима л. 46, вилѣвъ л. 50 об., видѣвъ л. 52, видѣ л. 64 об., видите л. 84 об., видѣ

л. 86 об., видѣвъѣ л. 91

увидѣти — увидѣ л. 3 об., увидѣ л. 8, увидѣвъ л. 45 об.,

слышати — слышавше л. 14 об., слышавъ л. 23 об., слышахомъ л. 27 об., слышахомъ л. 28, слышахомъ л. 28, слышавъ л. 32, слышно л. 37 об., слысахъ л. 44, слышаста л. 67 об., слышавше л. 72 об., слышавъ л. 86, слышавъ л. 88 об., слышаша л. 90, слышавше л. 93 об., слышитъ И.

въкусити — вкуси л. 26

узърѣти — узрѣша л. 65

вѣдѣти — вѣдяху л. 16, вѣдыи л. 26 об., вѣдыше л. 29, вѣси л. 36 об., вѣмы л. 37, вѣдыи л. 47 об., вѣси л. 58 об., вѣжъте л. 63, вѣдуще л. 63, вѣмы л. 63 об., вѣдыи л. 67 об., вѣдуще л. 77 об., вѣдомо И.

вѣдати — вѣдан И.

увѣдѣти — увѣсть л. 22, увѣсть л. 34, увѣдѣша л. 44, увѣдѣвше л. 46, увѣдѣвъ л. 59

увѣдати — увѣдавѣ л. 65 об., увѣдавъ л. 86

мнѣти — мняшеса л. 26 об., мняще л. 44, мнѣти л. 55 об., мнѣвъ л. 70 об., мня л. 86

разумѣти — разумѣста л. 29, разумѣхъ л. 56 об., разумѣ л. 64, разумѣ л. 64 об., разумѣте л. 84 об., разумѣ л. 88

испытати — испытавъ л. 35

помышляти — нача помышляти л. 47 об.

D. радоватися — радуюся л. 72

сѣжалитися — сжаливъси л. 70 об.

E. являти — являя л. 20 Р об.

свѣдѣтельствовати — свѣдѣтельствуеъ л. 77 об.

прообразити — прообрази л. 36

F. умиритися — умиришася на семъ л. 89

цѣловати — бѣ цѣловалъ на семъ л. 90 об., цѣловаша съ радостью л. 95

G. хотети — ▲хощю ИХ

H. вѣсть — посла л. 7 об., послаша л. 10, бѣ л. 45 об., приде л. 51, бысть л. 52, бысть л. 85 об., приде л. 86 об., приде л. 89 об.,

слово — ся исполнить книжное слово л. 9 об.

рота — ротѣ ходить л. 17 Р об., на роту ходить л. 13 об., на роту идуть л. 13 об., заходилъ ротѣ л. 88 об.

истина — имѣте во истину л. 22 об.

молба — повѣдаста молбу л. 89

рѣчь — повѣда вся рѣчи л. 89

извѣтъ — извѣта не имѣи л. 88 об.

рядъ — бѣ рядъ имѣлъ л. 93

I. радъ — ради быша л. 9 об., радъ бывъ л. 41

дивно — се же дивно есть л. 19 Р об.,

чюдно и дивно — се же бысть чюдно и дивно л. 65 об.

пристранѣ и страшнѣ — се пристранѣ и страшнѣ л. 74 об.

благо — благо тобѣ л. 72

увы — увы тобѣ л. 19 Р об., увы мнѣ л. 41

§ 2. так что の機能

これは、所謂「結果」の従属文の機能であるが、勿論ここには「結論」、「帰結」の意が含まれる。この機能を専ら表わす так что は16世紀に初めて登場する⁽⁵²⁾。それまでは яко を含む幾つかの多義接続詞がその機能を代理する。したがってその意味はほとんど文脈に依存する。

ところで、「原初年代記」における яко の総数中では、この機能のものは499例中22例、すなわち約4.4%にすぎない。今、主・従文各々の述語の形式に従って、例えば、過去（主文）＋不定詞（従文）等、の組み合わせに従って、分類すると以下の表ようになる。（ ）は合計の中に異本にだけ見られる яко の数（1）も含めたことを意味している⁽⁵³⁾。

	① 過去＋		② 過去＋過去	③ 非過去＋非過去	計
	INF.	INF.(過)			
яко	8	1	8 (1)	3	20 (1)
якоже	0	0	1	1	2
計	8	1	9 (1)	4	22 (1)

左表に見るように、この機能の中では、22例中9例、すなわち約40%は яко の率いる述属文の述語が不定詞の形で現れる。その時、主文の動詞はすべて過去である。

例えば、

1. Бѣ бо раслабленъ тѣломъ, яко не мощи ему обратитися на другую страну, ни встати, ни сѣдѣти.
(л. 65 об.)

[というのは（彼は）体が弱り果て、そのため、寝返りを打つことも、起きることも、坐ることも、彼にはできないほどであった。]

2. Знаменье явился на небеси, яко видѣти всен земли. (л. 50 об.)

[天にしるしが現れた。そのため、全国から見ることができるようであった。]

この構文が、結果の従属文の中でかなりの位置を占めることは、勿論ステツェンコ⁽⁵⁴⁾、プレアラジェンスカヤ⁽⁵⁵⁾、ブラホフスキー⁽⁵⁶⁾、ポチエブニヤ等において指摘されている⁽⁵⁷⁾。ブラホフスキーは、これが教会スラヴ語起源のものである、とした上で、上例1を挙げている。ポチエブニヤは、この яко ＋与格＋不定詞という形式が、ギリシャ語の μετὰ＋対格＋不定詞に相應するものだ、という指摘を行っている。以下は、オストロミール福音書マタイ伝27-14である⁽⁵⁸⁾。

И не отъвѣща емоу ни къ единому же глаголю, яко дивитися Иггемону зѣло. (О. ев., Мат. 27—14)

Kaì ouk ἀπεκρίθη αὐτῷ πρὸς οὐδέ ἐν ῥῆμα, ὥστε θαυμάζειν τὸν ἡγεμόνα λίαν.

すなわち, *ὥστε* (=яко) + *θαυμάζειν* (「驚く」の能動相現在 *INF.*) + *τὸν ἡγεμόνα* (ὁ ἡγεμών「総督」の単数・対格)である。現代ロシア語訳は, И не отвечал ему ни на одно слово, так что правитель весьма дивился.⁽⁵⁹⁾, であるが, 日本語聖書訳は「結果」の意味より, 「程度」の意味が強い。文語訳「されど総督の甚く怪しむまで, 一言をも答へ給はず」⁽⁶⁰⁾, 口語訳「しかし, 総督が非常に不思議に思ったほどに, イエスは何を言われても, ひと言もお答えにならなかった」⁽⁶¹⁾となっている。英訳は, *And he answered him to never a word ; insomuch that the governor marvelled greatly.* である⁽⁶²⁾。つまり, この形式の「結果」の意のニュアンスの不定詞構文は長い歴史を経て来たものである。そのため, 「結果」の機能での出現率も高く, そのことによって, この形式がтак что機能の構文であると判断するための補助的サインになり得るが, これは逆に, 「結果」の従属文の形式の未分化を証明したものと考えられる。なぜならば, これは古文において多様に展開される, 本来的に叙想性の強い不定詞構文の一環であって, 「結果」の意も, この場合, 程度, 様態等の機能との関係において発現するものだからである。ポチエブニヤによれば, §. 1 のчто機能のところでは登場して来る不定詞構文と比べれば, この場合は主文に対する独立性が高い, ということになるが,⁽⁶³⁾それでもなお「結果」の意義はяко自身の意義というよりは不定詞のものである, という点で, 結局 § 1 の場合と同じである。したがってこのякоも単に統語的従属を示す文法指標にすぎず, イポタクスへ分化して行く過程上のものと考えられる。

ところで, 上表のとおり, яко以下の不定詞が完全に過去形の独立不定詞文で現れて来るものが一例存在した。

Се же столпъ первѣ ста на трапезници каменѣи, яко не видѣти бысть креста. (л. 95 об.)

〔この柱は最初に石造りの僧院食堂の上に立ち, そのため十字架が見えないほどであった。〕

быстьなしでも文意は変らない筈である。ポチエブニヤはяко以下にこの機能での独立不定詞文の過去形を置く場合を一例⁽⁶⁴⁾しか示していないが彼によれば,⁽⁶⁴⁾それが無くても主文の過去の時制が投射されて不定詞は過去の意である。いずれにせよ, この場合 (быстьのある場合), 「結果」の意の比重は, быстьとякоに移行し, それと共にこの構文に伴う「程度」のニュアンスは稀薄になると考えられる。

こうした不定詞構文を含む「結果」の従属文と比べれば, 主, 従文共に過去形の人称文で現れる次の場合はよほどその「結果」の意は明瞭であろうが, яко自体の多義性によってやはり文脈に依存するところが大きい。上表中に見られるように, この場合も22例中9例で約40%を占めている。

В се же время земля сткнү, яко мнози слышаша. (л. 71 об.)

〔この同じ時大地が轟いた。そのため多くの人が(それを)聞いた。〕

なお, яко иの形式が2例見られた。そのうちの1例,

И помроща кони у вои Вородимерь, яко и еще дыщющимъ конемъ, съдираху хъзы съ нихъ. (л. 52)

〔そして、ヴォロヂメルの軍勢の馬が死んだ。そこで、まだ馬が呼吸している時、(人々は)馬から皮をはぎ取った。〕

ステツェンコはこのиを強意助詞とし、「結果」の意を強調する、⁽⁶⁵⁾としているが、プレアブラジェンスカヤは逆に、иは「程度」の意を強めるものだ、と解説している⁽⁶⁶⁾。リハチョフはтак, что иとして、иを残し、такとчтоの間にコンマを挿入して「程度」のニュアンスを強めている⁽⁶⁷⁾。このиの性格と関連して次の文をとらえてはどうであろうか。

Аще ли есть неимовить створивый убиство и убъжавъ, да держится тяжи, дондеже обрящется, яко да умереть. [л. 17 р.]

〔もしも殺害を行ったものが無資産であり、逃亡したならば、見つけ出されるまで裁判にかけられたままにされ、(見つけ出された時)死ぬべし。〕

このテキストにはякоをиに変えた異本がある。またдаのない異本もある⁽⁶⁸⁾。якоをиに変えた場合のиも、яко иのиも、Iの序論に述べた「文の構成単位間のいまだ接合不十分なるを縫合する如き役割」、つまりパラタクスのな従属関係の表現形式の残滓ではなかろうか。

次例のяко (же)の機能も微妙である。

И бѣ гладъ великъ, яко по полугривнѣ глава коняча, (л. 23)

〔馬の頭が半グリブナするほどの大いなる飢えがおこった。〕

Въ си же времена мнози человекѣци умираху различными недугы, якоже глаголаху продающе корсты, яко продахомъ... (л. 72)

〔この同じ頃に多くの人々が種々の病で死んでいった。十字架を売る人たちが語っていたところによれば「我々は……売った」というほどであった。〕

本稿ではこの上の二例を、「結果」の機能とし、上表では(過去+過去)の中に含めたが、前者のяко以下には動詞形はなく、この直後に続くアオリストによって、敢えてこの数に算入した。この訳にはもうほとんど「結果」の意はなく「程度」の意であるが、リハチョフはこれを「結果」として訳している⁽⁶⁹⁾。また後者の例におけるякожеは、上例訳では「準拋」を表わすが「程度」の意も考えられている。リハチョフに従って⁽⁷⁰⁾「結果」の中に算入した。

結局、「結果」の機能でのякоの完成度は極めて低い。不定詞による形式が多数を占めることもこのことを物語っている。これはякоの機能の完成度でなく、不定詞の叙想機能の融通性を示したものであり、その限りにおいて、これは、「結果」と「程度」の意の間を揺れていた形式であり、その揺れはбыстьを得て一定の到達点を見出したのである。

なお、この機能に算入したякоの現れる箇所は以下の通りである。上表の①～③で示す。

①л. 7 об; 49; 50 об; 55 об; 55 об; 65 об; 72; 88; 95 об, ②(л. 7); 14р; 23; 48 об; 52; 65 об; 71 об; 71 об; ▲72, ③ [л. 17 р.]; 22 об; ▲57 об; И. X.

最後に、ここまでの結びとして。

言語にとって、接続詞はやはり周辺部である。陳述の中心部の完成、換言すれば, предикативность

の安定化によって、言語はまず一般的な伝達機能を獲得し、その上に精巧な、論理的・意味的關係の完成に向うのである。従って、接続詞が原初的にポリセマンティックであることは、接続詞自身の責ではない。その言語の到達度を示したものに他ならない。陳述の中心部が、多回反復と習慣化という言語的練磨によって沈静、安定化し、その安定度に比例して周辺部である接続詞の職能もまた確定し、従ってその文法性も高まる。古語におけるякоの動態は、まさにそうした状況を反映したものだ、と言えよう。

〔註〕

1. Л. П. Якубинский, История древнерусского языка, Учпедгиз, М., 1953, стр. 268
2. このタームの語訳として、山口巖氏は「古代スラヴ語」とされ〔「中世ノヴゴロドの言語と文化」(1983年) 発表の論文「ノヴゴロド第一年代記シノダリ本における古代スラヴ語要素について」〕, また故木村彰一氏も「古代スラヴ語」〔同氏著「古代教会スラヴ語入門」, 白水社, 1985年〕とされている。本稿では、故菱山忍氏の「古スラヴ語」の訳語を借用した〔「古代ロシア研究」№4, 京都大学ロシア語研究室内, 日本古代ロシア研究会編, 1964〕。また、国際的には*Altkirchenslavisch*, древнецерковнославянский языкとも称されるが、本稿では、ハブルガーエフの解説(Г. А. Хабургаев, Старославянский язык, Просвещение, М., 1974, стр. 5—8.)に従う。
3. Историческая грамматика русского языка. Синтаксис. Сложное предложение. под ред. В. И. Борковского, Наука, М., 1979, стр. 112-114.
4. Там же, стр. 55. nは文語において, aは口語を反映した文献において多数を占める, という。
5. 以下のテキストの翻訳は, 「原初年代記」と「ノヴゴロド第一年代記」に関しては, 基本的には「古代ロシア研究」№1～№15 (1963～1983) によるが, 若干修正したものもある。
6. Е. С. Истрина, Синтаксические явления Синодального списка 1 Новгородской летописи, Известия Отделения русского языка и словесности, т. 26, Санктпетербург, 1921, стр. 232.
7. Структура предложения в истории восточнославянских языков, под ред. В. И. Борковского, Наука, М., стр. 105, 108-119.
8. Э. И. Коротаяева, Союзное подчинение в русском литературном языке 17 века, Наука, М.-Л., 1964, стр. 26.
9. Она же.
10. А. А. Потехня, Из записок по русской грамматике, т. III, Просвещение, М., 1968, стр. 251.
Он же, т. I - II, Учпедгиз, М., 1958, стр.197.
11. М. В. Ломоносов, Полное собрание сочинений, т. 7, Из-во АН, М.-Л., 1952, Краткое руководство к красноречию, стр. 376—377.
12. Э. И. Коротаяева, там же, стр. 24.
13. Т. П. Ломтев, Очерки по историческому синтаксису русского языка, Из-во Мос. ун-та, 1956, стр. 491.
14. Я. А. Спринчак, Очерк русского исторического синтаксиса, II, Сложное предложение, Из-во Ряд. шк., К., 1964, стр. 11.
15. Т. П. Ломтев, там же, стр. 488.
16. J.デュボア他著, Рalуpс言語学用語辞典, 大修館書店, 1980, p.293.
17. Я. А. Спринчак, там же, стр. 15.
18. Истор. грам. рус. яз., под ред. Борковского, 1979, там же, стр. 59—60.
19. С. П. Обнорский, Очерки по истории русского литературного языка, Из-во АН, М.-Л., 1946, стр. 64, 175.
20. А. С. Стеценко, Исторический синтаксис русского языка, Выс. школа, М., 1977, стр. 131.
21. Е. И. Истрина, там же, стр. 220—223.

22. Г. А. Хабургаев, Старославянский язык, Просвещение, М., 1974, стр. 333, 338—339.
23. Э. И. Коротаева, там же, стр. 217—219.
24. Народная библиотека, А. Н. Радищев, Путешествие из Петербурга в Москву, Из-во Худ. лит., М. -Л., 1964, стр. 116
Сие запрещают правила естественности, яко вещь бесполезную для человека, сие запрещать долженствовал бы закон гражданский, яко вредное для общества. その他стр. 88, 89, 96, 100, 155...等多数。
25. Л. А. Булаховский, Русский литературный язык первой половины 19 века, Учпедгиз, М., 1954, стр. 406. "...Народ увидит ясно Тогда обман безбожного злодея И мощь бесов исчезнет яко прах."
26. Иржи Мудра, Ян Петр, Учебник верхнедужицкого языка, *VEB Domowina Verlag, Bautzen*, 1983, стр. 293, 273, 272.
27. К. К. Trofimowič, *Hornjoserbsko-ruski słownik, Ludowe nakładnistwo Domowina, Budyšin*, 1974, стр. 69.
28. И. И. Толстой, Сербско-хорватско-русский словарь, Из-во Сов. Энци., М., 1970, стр. 17.
29. И. И. Срезневский, Материалы для словаря древнерусского языка по письменным памятникам, т. III, *Akademische Druck-u Verlagsanstalt, Graz*, 1956, стр. 1652—1655.
30. テキストとしては、「古代ロシア研究」№1～№11に転載されたものを使用した。必要に応じて、このテキストのもとになった Полное собрание русских летописей, т. 1, Лаврентьевская летопись, Санктпетербург, 1846.に戻り, また, 次のテキストを併用した。
Полное собрание русских летописей, т. 1, Лаврентьевская летопись, Воспроизведение текста издания 1926—1928 годов, Из-во Восточной литературы, М., 1962.
Памятники литературы древней Руси, Сос-ние Л. А. Дмитриева, Д. С. Лихачева, 11-начало 12 века, Худ. лит., М., 1978, Повесть временных лет стр. 22—277, Поучение Владимира Мономаха стр. 392—413.
31. Э. И. Коротаева, там же, стр. 172.
32. Памятники литературы древней Руси, 1978, там же, стр. 234—235.
33. Там же, стр. 190—191
34. Там же, стр. 124—125.
35. 「主文にあらわれる…」というものの中には、①主文の述語に対する第二述語（形動詞）に関係する場合、②第一従属文中の述語に関係する場合（第二従属文をもつ時）も含んでいる。
36. A～I の якоの合計は179であるが、и разумъте и видите, яко (л. 84 об.)の場合は якоを一回として算えるため、178となる。
37. Ист. грам. рус. яз., под ред. Борковского, там же, стр. 423.
38. Там же, стр. 434—435.
39. Там же, стр. 435.
40. А. Н. Стеценко, там же, стр. 308.
41. Ист. гр. рус. яз., под. Борковского, там же, стр. 118.
42. С. П. Обнорский, там же, стр. 68—69.
43. *The Holy Bible, Oxford Printed at the University press for the British and Foreign Bible Society, p. 578.*
The Lord shall laugh at him : for he seeth that his day is coming.
44. Памятники литературы древней Руси, 1978, там же, стр. 39.
господь же посмеется над ним, ибо видит, что настанет день его.
45. Библия, Издание Мос. Патриархии, М., 1976, стр. 549, Псалтырь 36.
Господь же посмеивается над ним, ибо видит, что приходит день его.
46. 旧約聖書, 1955年改訳, 日本聖書協会, 1965, p.778。
47. 舊新約聖書, 引照付, 日本聖書協会, 1976, p.994 (舊約聖書)。
48. Ист. гр. рус. яз., под ред. Борковско, там же, стр. 206.
49. Там же, стр.114-115.

50. Там же, стр. 125-127.
51. Там же, стр.118.
52. Там же, стр. 337.
53. Памятники литературы древней Руси, 1978, там же, стр. 34.
Въ лѣто 6366. Болгаре же увидѣвши, яко не могоща стати противу ...
54. А. Н. Стеценко, там же, стр. 274.
55. Ист. гр. рус. яз., под ред. Борковского, там же, стр. 323.
56. Л. А. Булаховский, Исторический комментарий к русскому литературному языку, Учпедгиз Ряз. щк., к., 1958, стр. 393.
57. А. А. Потебня, там же, т. I-II, стр. 419-421.
58. Остромирово евангелие (А. Востоков), 1845, Санктпетербург. によって, ギリシヤ語テキストを補った。
стр. 185.
59. Библия, изд. Мос. Пат., там же, стр. 1051.
60. 舊新約聖書 (前掲書), p.61 (新約聖書)。
61. 新約聖書 (前掲書), p.47.
62. *The Holy Bible* (前掲書), p.941-942
63. А. А. Потебня, т. I-II, там же, стр. 419.
64. Там же, стр. 419. Наиде рана на полочаны, яко нѣкако бѣше ходити по улничямъ (Новг I, 6,600); стр. 421 (*INF.*
のテンス)
65. А. Н. Стеценко, там же, стр.273.
66. Ист. гр. рус. яз., под ред. Борковского, там же, стр. 324.
67. Памятники литературы древней Руси, 1978, там же,стр.169.
68. *P* (ラヂヴィロフ本), *T* (トロイツァー本) になく, *X*. (フレブ本) で脱落。
69. Памятники литературы древней Руси, 1978, там же, стр. 88.
70. Там же, стр. 226.